

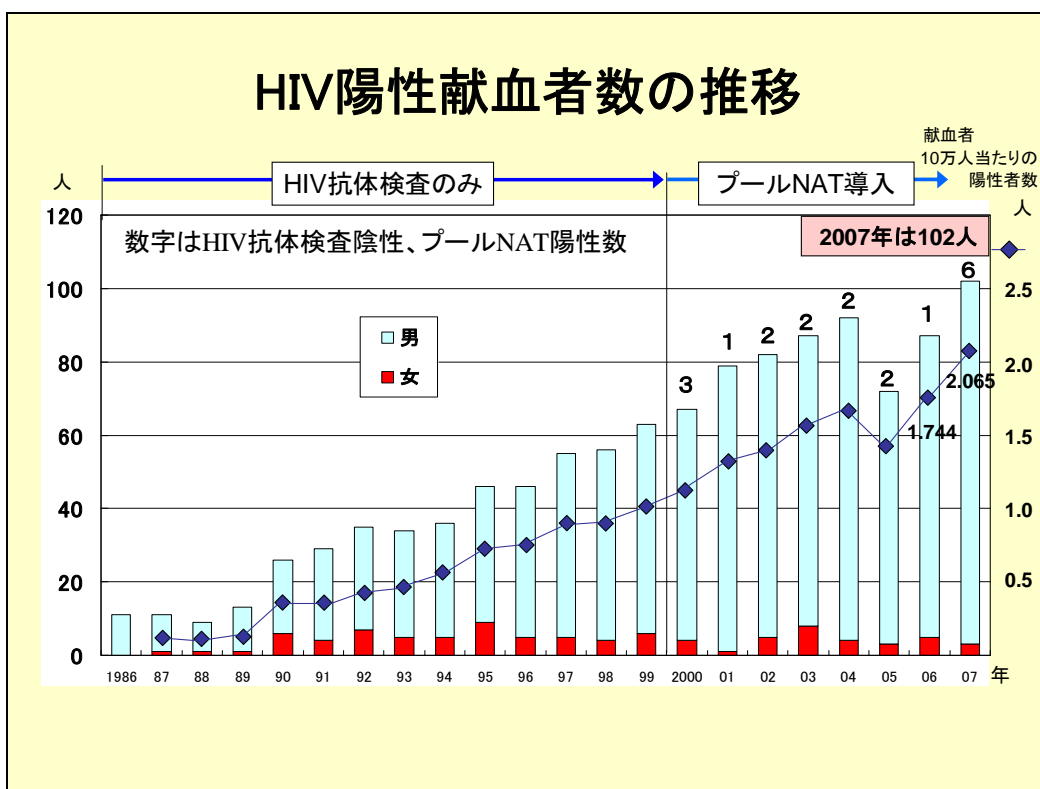
エイズウイルス(HIV)など感染の疑いがある方は、絶対に献血しないで下さい。

— 2007年のHIV陽性献血者数は102人 —

HIV 陽性献血者数の増加

日本赤十字社では、輸血によるエイズウイルス(HIV)感染を防止するために、献血していただいた血液に対して1986年11月からHIV抗体検査を開始しました。その後、ウイルスを高感度に検出するために1999年10月からウイルスの核酸増幅検査(NAT)を導入しています。

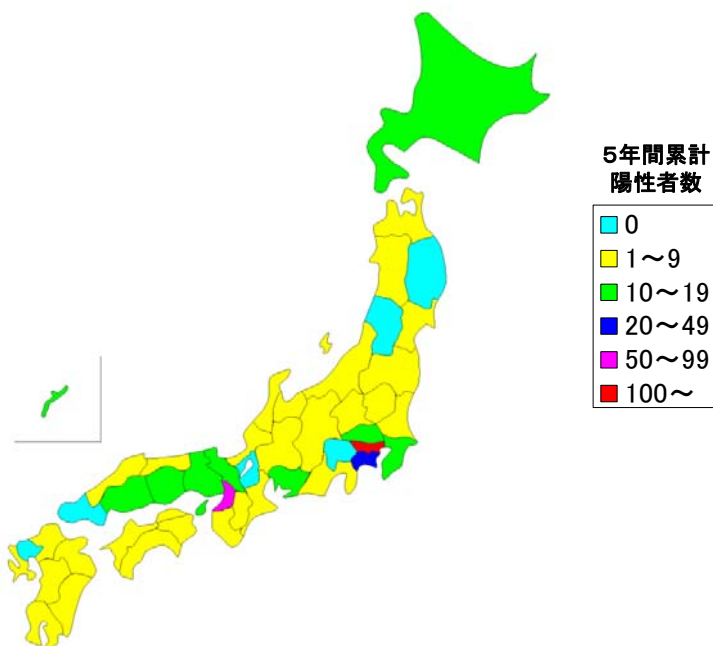
その結果、献血された血液の検査で HIV 陽性と判定される件数は年々増加し、2007年は102件と過去最多となっています。また、献血者10万人当たりのHIV陽性者数についても、折れ線グラフで示すとおり2007年は2.065人となりました。これは、厚生労働省エイズ動向委員会に報告されているように、わが国全体のHIV感染者数が増加していることや、HIV検査を目的とした献血などの影響ではないかと推測されています。



HIV 陽性献血者数の推移を示す棒グラフの上に表示されている数字は、HIV抗体検査は陰性でNATのみ陽性になった件数です。

都道府県別の最近5年間は、東京、大阪など大都市圏が多い状況ですが、全国的に広がる傾向もみせています。なお、2007年のHIV陽性献血者数は、大阪の26人が最も多く、東京は17人でした。

都道府県別HIV陽性献血者数(2003～07年)



HIV 検査目的の献血の危険性

ウイルス検査目的の献血は危険です！

献血を介して患者さんに感染させる危険性があります。

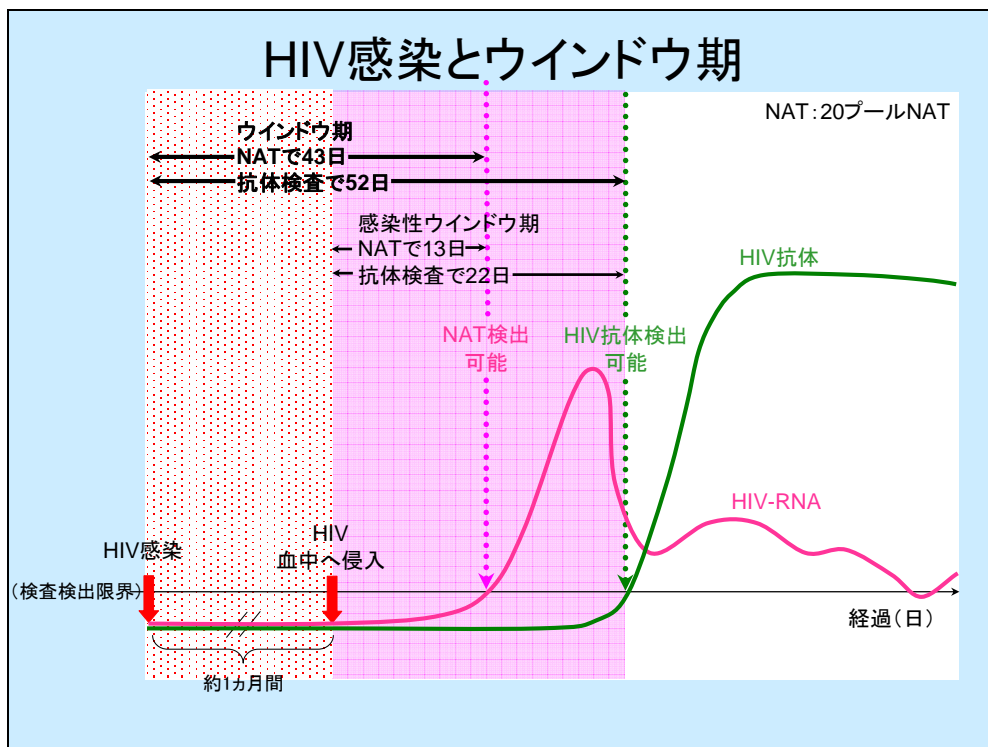
HIVに性交渉等で感染した場合、HIVは約1ヵ月間は感染局所にとどまっているといわれています。さらにHIVが血液中で増殖し、検査で検出できるようになるまでに一定期間が必要です。HIVに感染してから検査で検出されるようになるまでの期間を「ウインドウ期」と呼び、特にHIVが血液中に現れ、検査で検出されるようになるまでの期間を「感染性ウインドウ期」と呼びます。

HIVの感染性ウインドウ期は、抗体検査で約22日、日本赤十字社が実施している感度のよいNAT(*20プール)では約13日と推定されます。つまり、HIVに感染するような機会があつてから約43日間は検査で検出することができません。

* 現在、20本の検体を1本にまとめて検査(NAT)しています。

検査目的の献血は、まさにこの感染初期のウインドウ期に献血される可能性が高いため、HIV を検査で検出することはできず、患者さんに感染させる可能性があるのです。そのため、献血の際の問診は大変重要な意味を持っています。

もし、HIV など感染の疑いがある方はウインドウ期を考慮し、この期間を経過したのちに保健所等の検査機関で検査を受けるようにして下さい。保健所等の検査機関では、わずかな採血量で無料・匿名の検査が行えます。



輸血による HIV 感染例

日本赤十字社では輸血による HIV 感染を 4 例確認しています。そのうち 3 例は HIV 検査が抗体検査のみであった時期の献血によるもので、1 例は NAT 導入後に発生しています。2004 年以降は輸血による HIV 感染は確認されていません。

しかし、HIV 陽性献血者数が増加していることから、今後、より徹底した対応が求められており、感染初期のウインドウ期の献血を防止していく必要があります。

HIV 陽性献血者数の推移を示すグラフの「HIV 抗体検査は陰性で NAT のみ陽性になった件数」が、2007 年は 6 件でした。これらの血液は、もし NAT を実施していなければ輸血に使われた可能性があるもので、感染初期のウインドウ期の献血が増加していることを示唆しています。

そして、「**検出感度の優れている NAT といえども、感染ごく初期のものは検出することができない**」ことを知っておいていただきたいのです。

(参考資料)

- 「HIV 検査・相談マップ」
<http://www.hivkensa.com>
- 「エイズ予防情報ネット」
<http://api-net.jfap.or.jp>
- 平成 19 年版「血液事業報告」厚生労働省医薬食品局血液対策課
- 厚生労働科学研究班「献血時の問診、説明と同意に関する研究」関連資料



献血は、患者さんの生命を守る「愛の贈りもの」

血液は生命を支えるかけがえのないもの

輸血を必要とする 大切な誰かのために、

そして善意に満ちたあなたの笑顔のために、

**「エイズウイルス(HIV)など感染の疑いがある方は、
絶対に献血しないで下さい。」**